鳴沢村の遺跡

一　はじめに

本村における原始・古代の遺跡は、豊富とは言い難いが、鳴沢、大田和両地域を中心にほぼ万遍なく分布しており、富士北麓の他地域と同様な傾向を示している。しかし、本格的な考古学調査はあまり実施されておらず、考古資料の発見も散発的であるために、具体的な様相をうかがうことは容易ではないが、従前の学術成果を踏まえながら、村内における原始・古代のありかたの一端をながめていきたい。

二　遺跡の立地と分布

村内では現在、合計二十三の遺跡が知られている。後述の分布図が示すとおり、遺跡数はそれほど多くはないが、鳴沢、大田和の両地域の平地部分を中心に広く展開しており、溶岩流や火山灰層などの厚い堆積土層下の埋没遺跡の状況も含めて考えると、かなりの遺跡の存在が推測されている。

これらの遺跡を年代別にみると、縄文時代早期から前期、中期におよんでおり、かなり古い時期から人々の生活が営まれたことがわかる。この時期の遺跡は、三ヵ所で知られ、鳴沢地内の水上遺跡や大田和字家上川原の大田和遺跡のように、足和田山南斜面に形成された小扇状地の扇頂部分に立地するなど、共通部分も少なくない。いまのところ、縄文後期以後の遺跡は見られないが、これは中期以後に遺跡数が減少する山梨県下全体の特徴と軌を同じくするものであろう。

稲作社会に本格的に突入する弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は、現在では皆無に近い。この傾向も、とくに県内の山間地域における遺跡のあり方とよく整合しており、きわめて普遍的なありかたである。

こうした標高の高い山麓地域や山間地に遺跡が再び増加していくのは、平安時代の九世紀ごろに入ってからで、本村もほぼ同様な傾向を示す。いままでに知られている遺跡数は七ヵ所とまだ少ないが、縄文期より遺跡分布は拡散しており、古代集落が広範囲に展開し

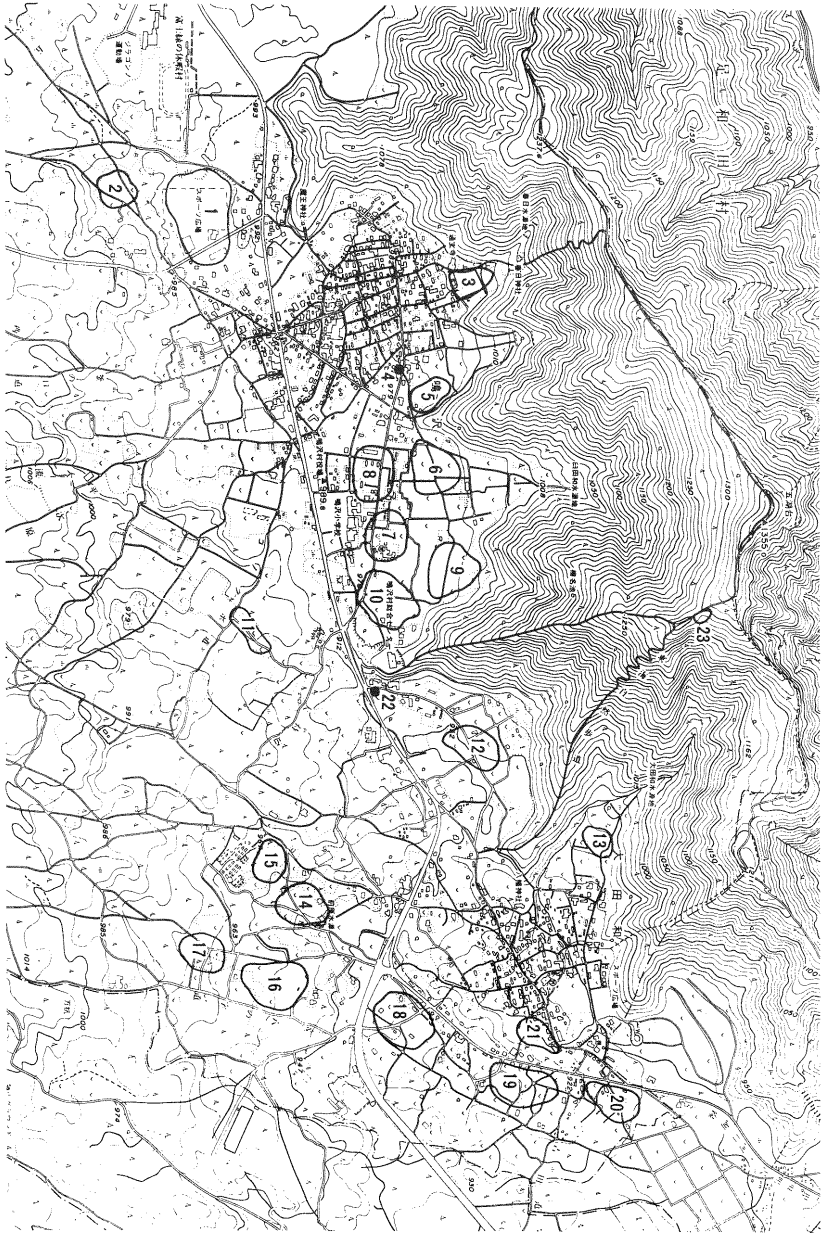
ていた様相をうかがわせている。木暮遺跡、小坂A遺跡・同B遺跡、上大持遺跡などは、比較的近接しながら、富士山麓の緩やかな北斜面上に立地しているが、この付近には、甲斐と駿河を結ぶ古代の官道の若彦路が通っており、官道との関わりのなかで発展した古代集落の感を濃くしている。長塚地内にある長塚遺跡も若彦路に近い遺跡である。

中世以降の遺跡はいちじるしく増加し、村内全域に広く分布するようになる。遺跡数は、十五ヵ所あり、当時の生活用具である陶器類や土師質土器、内耳形土器などが出土している。この中には、足和田山中の鞍部にある役行者屋敷跡のような特異な信仰に関わる遺跡もあり、遺跡の内容はますます多様な性格を帯びていく。こうした遺跡分布の状況は、中世から近世にかけて村が発展していく様子の一端を示すものであるが、日常生活の諸相を含めた村の全体像となるとまったく定かではなく、今後に託された課題となっている。

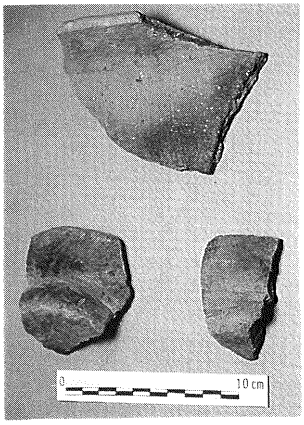
（萩原三雄）

三　鳴沢村の遺跡（遺跡番号は『鳴沢村史』第一巻による）

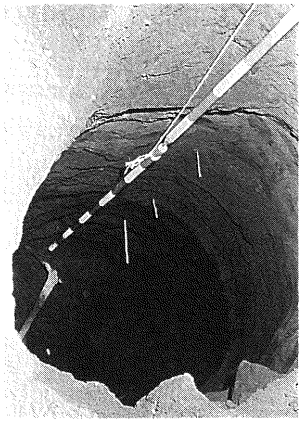
遺跡番号　一　**遺跡名**　前丸尾遺跡　**所在地**　鳴沢村前丸尾　**種別**　包蔵地　**時代**　平安及び中世以降か　**立地と現状**　標高九百八十m付近で、かつての溶岩採石場跡内（現在のスポーツ広場内）に位置する。山本寿々雄氏によると、青木ケ原溶岩流の直下、黒色土中より土師器甕片が出土した。更に新聞記事によると、昭和五十八年頃、魔王神社付近の青木ケ原溶岩層（厚さ四～五m）より下の火山灰層中から、採石作業中に「青銅製象耳付き三つ足香炉」が出土した。両者とも確かな出土場所は不明。遺跡付近の地形は溶岩流が被覆しているため、かつての地形はよくわからないが、現状では東西に長い谷状地形で、南から流下した富士溶岩流が足和田山でせき止められ厚くなっている。おそらく、かつての立地は足和田山南麓の小河川に面した暖斜面であったと思われる。採石作業が終焉した現在、北側に厚さ十m以上にも及ぶ溶岩流の断面を観察でき、溶岩直下に焼土化した橙色土層をみることができる。またこの一帯の溶岩台地には「鳴沢の溶岩樹



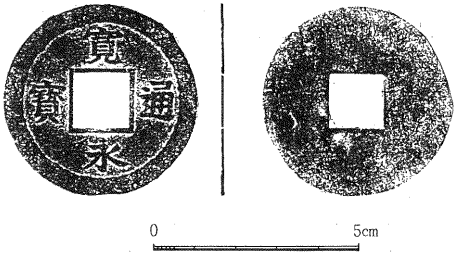
鳴沢村遺跡分布図



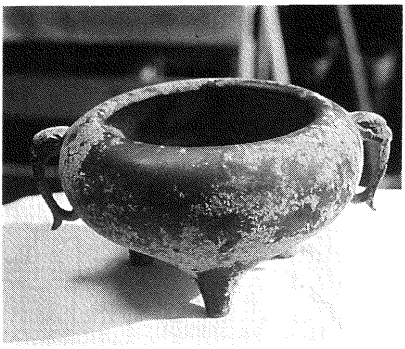
前丸尾遺跡 採集の土師器

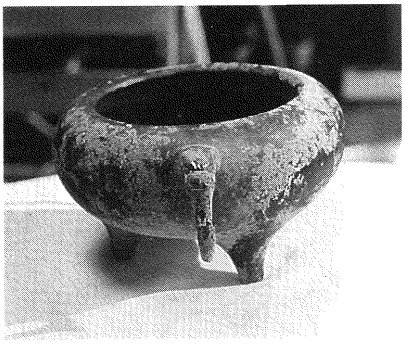


地蔵前遺跡　石鏃が出土した穴



大木原Ｂ　遺跡出土　寛永通宝





前丸尾遺跡採集の香炉

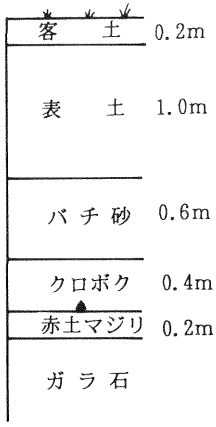
型」として名高い樹型群や、スパイラクル群があり、地質学的にも貴重な地形となっている。このスパイラクルとは溶岩流が湿った土壌や湿地帯に流れこんだときにガスが溶岩を通過して爆発した痕跡であり、過去の自然環境を探る手がかりになる。　**採集遺物**　山本氏が保管する土師器片は甕口縁一、甕底部一で、九世紀後半から十世紀前半の特徴をもつ（写真参照）。この遺跡を埋めた溶岩流は青木ヶ原丸尾で、貞観六年（八六四）の富士山の噴火で形成されたことが『日本三代実録』の記事との対比でわかる。「水熱きこと湯の如く、魚鼈（べつ）皆死し、百姓の居宅、海と共に埋もれ、或いは宅有りて人無きもの、其の数記し難し」とあるように多数の住民に大きな被害を与えた自然災害であったが、年代が特定できる溶岩流として考古学的には参考になる。溶岩下出土の土師器の年代は、溶岩流の年代と同じ頃もしくは古く考えることができ、土師器の特徴はそうした年代観と整合している。なお山梨県埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば高坏も出ているようだが、所在は不明。また香炉は、新聞記事によれば直径五十三・五㎝で高さ六・五㎝、重さは約七百g程度。表面はかなり焦げた跡があるものの完全な原形を保っているという。貞観六年（八九六）以前、中国からの渡来品とみられるとのことであるが、定かではない。内湾した鉢で、象耳状の把手が二個向かい合う。また把手の肩には獅子頭状の装飾がある（写真参照）。脚は三個。県立富士ビジターセンターで展示の後、富士吉田市の早川庄作氏が保管。　**文献**　『山梨県埋蔵文化財包蔵地調査カード』一九七二、「千年以上の遺物　前マルビ石取場から出土」『広報なるさわ』一九八一（二月）、山本寿々雄『日本の古代遺跡　14　山梨』一九八四　保育社、読売新聞記事、『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　二　**遺跡名**　蛇休場遺跡　**所在地**　鳴沢村蛇休場　**種別**　散布地　**時代**　中世以降　**立地と現状**　青木ヶ原丸尾の溶岩台地上にある平坦な畑地内で、標高九百七十五m。　**採集遺物**　陶器・土師質土器が散布する。このうち土師質土器は外面が黒変しており、中世から近世に使用された内耳土器等の煮沸具かと思

われる。青木ケ原溶岩台地が生活環境として安定化した段階を示している。　**文献**　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　三　**遺跡名**　水上遺跡　**所在地**　鳴沢村水上　**種別**　散布地　**時代**　縄文時代前期〜中期　**立地と現状**　足和田山南斜面で、春日水源地付近からの水流により形成された小型の扇状地の扇頂部。範囲は東西・南北ともに二百m。富士山を南に見る日当たりの良い急傾斜地である。溶岩流はみられないものの、火山灰（スコリア）が表土をなす。　**採集遺物**　かつて縄文土器、石鏃、石斧が採集されたようであるが、詳細不明。　**文献**　山本寿々雄『甲斐石器時代遺物発見地名表』一九五五、同『山梨県の考古学』一九六八　吉川弘文館、『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　四　**遺跡名**　地蔵前遺跡　**所在地**　鳴沢村鳴沢九〇二　渡辺長氏宅　**種別**　散布地　**時代**　縄文　**立地と現状**　足和田山南麓の緩斜面で現在は住宅地となっている。昭和五十五年十二月十九日、渡辺長氏宅軒下を排水施設整備のため地下二・五mほど掘ったところ、表土より二mの深さから縄文時代の石鏃を発見した。当時のメモによると、表土・バチ砂の下にクロボクがあり、そこからの出土であるという（写真・図参照）。これによって縄文時代の包含層の層位的位置が推定でき、縄文時代以降の火山灰の堆積がいかに厚いものであったかがわかる。また富士吉田市周辺では、クロボクは縄文時代早期に比定されているので、早期のものかもしれない。　**採集遺物**　出土したのは黒曜石製の石鏃一点で、長さ二・五cm、幅一・五cm、重さ一・一七g。　**文献**　「縄文時代の石鏃（やじり）発見」『広報なるさわ』一九八一（二月）、『鳴沢村史』第一巻



▲→ 石鏃出土地点

遺跡番号　五　**遺跡名**　小鳴沢遺跡　**所在地**　鳴沢村小

鳴沢　種別　散布地　時代　中世以降　立地と現状　足和田山南麓、鳴沢村役場裏の平坦な畑地である。採集遺物　土師質土器　文献　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　六　遺跡名　並木A遺跡　所在地　鳴沢村並木　種別　散布地　時代　平安・中世以降　立地と現状　臼田和水源地付近を扇頂とする小扇状地の扇央部にあたる畑内で、標高九百八十m。南向きの緩斜面である。採集遺物　土師器の平安時代甕片および土師質土器片がある。文献　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　七　遺跡名　並木B遺跡　所在地　鳴沢村並木　種別　散布地　時代　中世以降　立地と現状　鳴沢小学校裏にあたり、南向きの平坦な畑地である。採集遺物　陶器や内耳土器などの煮沸具と思われる土師質土器がある。文献　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　八　遺跡名　道下遺跡　所在地　鳴沢村道下　種別　散布地　時代　中世以降　立地と現状　足和田山南麓の山裾が平坦化したところで、畑地である。採集遺物　陶器や内耳土器かと思われる土師質土器がある。文献　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　九　遺跡名　東臼田和遺跡　所在地　鳴沢村東臼田和　種別　散布地　時代　中世以降　立地と現状　足和田山南麓の南向き斜面の畑地内で、山裾のやや急な地形である。標高九百八十五m。採集遺物　土師質土器　文献　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　十　遺跡名　境野道上遺跡　所在地　鳴沢村境野道上　種別　散布地　時代　中世以降　立地と現状　足和田山南麓、鳴沢村総合センター西の平坦地。採集遺物　内耳土器等の底部と思われる土師質土器がある。文献　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　十一　遺跡名　大持遺跡　所在地　鳴沢村大持　種別　散布地　時代　中世以降　立地と現状　富士山北麓の末端にあたり、標高九百八十m。採集遺物　鉢形土器頸部と内耳土器底部片かと思われる土師質土器がある。文献　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　十二　遺跡名　大木原A遺跡　所在地　鳴沢村大木原　種別　散布地　時代　中世以降　立地と現状　大田和集落の西、足和田山南麓の平坦地の畑地内。富士山の溶岩台地が南側に迫っており、国道一三

九号線の走る台地縁辺からは十mほど低い。標高九百五十m。**採集遺物**　土師質土器と緑釉陶器があるが、時期は不明。**文献**　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　十三　**遺跡名**　大田和遺跡　**所在地**　鳴沢村大田和家上川原　**種別**　散布地　**時代**　縄文時代早期・前期・後期　**立地と現状**　足和田山南東部の小扇状地上で、扇頂部付近のやや急な傾斜地の畑地。標高九百五十m。**採集遺物**　山梨県埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば縄文時代早期茅山式、前期諸磯b式が採集されたというが、現在所在は不明。また石匙も出ているようである。**文献**　山本寿々雄『甲斐石器時代遺物発見地名表』一九五五、同『山梨県の考古学』一九六八　吉川弘文館、『山梨県埋蔵文化財包蔵地調査カード』一九七二、『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　十四　**遺跡名**　小暮遺跡　**所在地**　鳴沢村小暮　**種別**　散布地　**時代**　平安・中世・近世以降　**立地と現状**　富士山北麓の北向きの平坦な畑地で、小坂A遺跡（十五）の東北である。標高九百四十m。**採集遺物**　内耳土器の底部を利用した土製円盤があり、二・八cm×二・六cm、六・七一g。楕円形で周囲は磨かれ、一端に切れ目状の加工を施しており、おはじきかと思われる。ほかに平安時代の土師器があり、甲斐型土器の内面黒色杯（内面に水漏れ防止のための吸炭処理をした土器）である。また土鈴の破片があり、子供の虫封じのためにもたせた虫切りの鈴であろう。**文献**　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　十五　**遺跡名**　小坂A遺跡　**所在地**　鳴沢村小坂　**種別**　散布地　**時代**　平安　**立地と現状**　富士山麓の緩やかな北斜面の山林中に造られたグランド内で、標高九百五十m。**採集遺物**　平安時代の土師器坏がある。いわゆる甲斐型土器（奈良、平安時代に甲府市東部で作られて、甲斐国一円に流通した土師器）で、表面に竹管状工具による「大」と思われる線刻がある。焼成後の刻書で、内面にも同様な工具による擦痕がある。**文献**　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　十六　**遺跡名**　小坂B遺跡　**所在地**　鳴沢村小坂　**種別**　散布地　**時代**　平安　**立地と現状**　富士山北麓に発達した南北に細長い尾根状の地形上の畑地

で、緩やかな北向き斜面である。標高九百五十m。**採集遺物**　甕形土器の胴部破片と思われる土師器片がある。**文献**　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　十七　**遺跡名**　上大持遺跡　**所在地**　鳴沢村上大持　**種別**　散布地　**時代**　平安　**立地と現状**　富士山麓の緩やかな北斜面の畑地で、標高は九百七十m。**採集遺物**　土師器の小破片が一八点採集されており、うち甕片とわかるものが五点ある。平安時代の甕にしては、いわゆる甲斐型甕とは胎土（粘土）の色調が異なっている。**文献**　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　十八　**遺跡名**　犬の子草里遺跡　**所在地**　鳴沢村犬の子草里　**種別**　散地　**時代**　不明　**立地と現状**　国道一三九号線と県道鳴沢・河口湖線の交差点付近で、富士北麓の緩やかな北斜面の畑地。標高九百五十m。**採集遺物**　土師器らしき坏片があるが時期不明。**文献**　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　十九　**遺跡名**　札木遺跡　**所在地**　鳴沢村札木　**種別**　散布地　**時代**　中世以降　**立地と現状**　勝山村方向へ傾斜する溶岩流台地の縁辺部で、標高九百二十m付近の畑地。**採集遺物**　近世以降の陶器（茶碗・摺り鉢）、内耳土器胴部の土師質土器片、瓦器と思われるものがある。**文献**　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　二十　**遺跡名**　長塚遺跡　**所在地**　鳴沢村長塚　**種別**　散布地　**時代**　平安　**立地と現状**　富士北麓の溶岩流台地上で、北向き緩斜面の畑地である。**採集遺物**　土師器（坏二点）がある。**文献**　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　二十一　**遺跡名**　前原遺跡　**所在地**　鳴沢村前原　**種別**　散布地　**時代**　近世以降　**立地と現状**　大田和集落の東、札木遺跡（十九）より百mほど西の谷部で、溶岩流台地の脇にあたる。標高九百二十m。**採集遺物**　陶磁器片数点で、江戸と思われる天目茶碗片もある。**文献**　『鳴沢村史』第一巻

遺跡番号　二十二　**遺跡名**　大木原B遺跡　**所在地**　鳴沢村大木原　**種別**　埋納遺構か　**時代**　江戸以降　**立地と現状**　国道一三九号線と村道の交差点付近。**採集遺物**　昭和五十九年頃、小林恒男氏が重機で道路工事をした時、地下三十cmの土中より古銭が出土した。

ばらばらに出土したが、元はまとまっていたようである。また古銭とともに灰が出てきたという。現在、小林氏が所蔵するのは、寛永通宝一六六枚である。これらの古銭は直径が四・六八～四・七七㎝と通常のものよりも大きく、厚さは〇・四～〇・七㎜、重量は五・一八～六ｇで、銅あるいは真鍮の板に「寛永通宝」の文字をプレスし、裏面には模様が全くない（図参照）。また大半が焼け、歪んだものが多い。これらは通用銭ではなく、私的に密造された博打の掛け金、あるいは奉賽銭と思われるが、類例を知らない。時代的には江戸以降、近代に至る間の所産であろう。　**文献**　なし

遺跡番号　二十三　**遺跡名**　役行者屋敷跡　**所在地**　鳴沢村西臼田和　**種別**　寺院址か　**時代**　中世から江戸？　**立地と現状**　大田和の集落から足和田山を四〇分ほど登った尾根の鞍部にある。削平地があり、礎石が数個残存しているという。『甲斐国志』には「壇ノ山ノ内雨乞山ノ上ニアリ少シ平地ナル所礎石存セリ其辺ニ小池アリ麗水常ニタタヘテ旱魃ニモ涸ルコトナシ往昔ハ山伏ドモ比山ニ参籠シ行法ヲ修シケルトゾ」とあり、信仰に関わる施設と考えられる。　**採集遺物**　なし　**文献**　『鳴沢村史』第一巻、畑大介「芦川村周辺の山岳信仰遺跡」『甲斐路』七七　一九九三

（櫛原功一）

四　まとめ

本村で現在確認されている二十三の遺跡について、全体的な様相をおおづかみにながめて見ると、他の富士北麓地域や八ヶ岳山麓の遺跡群が有する特質と大きな相違はない。縄文時代早期から前期ごろに人々の生活が開始され、中期に至って大きく開花し、やがて縄文後期以降になってしだいに衰退をしていく。弥生時代や古墳時代の社会は根づかないが、平安時代の九世紀ごろになって再びこうした山麓や台地に人々の進出が開始されていく。こうした大きな歴史的な変化は、本県をはじめとする中部山岳地帯によく見られる現象で、本村も同じような推移を繰り返しているようである。ただし、近年の考古学調査の成果によれば、こうした地域からも縄文後晩期の遺跡や弥生末～古墳時代の遺跡の発見が相次いでおり、従来の歴史観が見直し

を余儀なくされようとしている。本村においても、今後の資料の蓄積を待って、あらためて原始古代社会のあり方を論じなければなるまい。

平安期の遺跡から出土する土師器について、「甲斐型土器」という甲斐国特有な土器群がある。甲府盆地を中心に、さらに駿河、信濃などにも大きな広がりをみせているものであるが、本村でも木暮遺跡や小坂A遺跡で坏などの甲斐型土器が発見されている。甲府盆地などと共通の文化流通圏にあったことを示唆していよう。ただし上大持遺跡では、甲斐型甕とは異なる土器も見られ、他地域とも積極的な交流が図られていたこともわかる。

本村の原始古代社会を考えるうえで、もっとも重要なことは、厚い溶岩流や火山灰層に覆われた遺跡が多いということである。富士北麓の平安期の遺跡群の特色として、堀内真氏によってかなり早くから指摘されていることであり（『信濃』三〇―九）、富士吉田市下吉田の馬捨場遺跡などが紹介されているが、本村の前丸尾遺跡なども古くから知られている。隣村の上九一色村の本栖湖畔に所在する湖水遺跡や上野原遺跡なども同様な性格の遺跡であり、こうしてみると富士北麓一帯にはかなりの広範囲に及んで、原始古代の村々が溶岩流や火山灰層下に埋没していると見てよい。山麓における開発と生活、さらに火山災害との関係などを考えていくうえで、きわめて貴重な歴史資料であり、村内の遺跡群が語る歴史的意義も大きい。

（萩原三雄）

1　〔前マルビ遺物の拓本〕昭和五十六年（一九八一）

〔解説〕山梨県考古学資料室（民間研究施設）の、山本寿々雄氏が、かつて鳴沢村丸尾青木ヶ原溶岩流下から発見した「考古学資料」を、「広報なるさわ」に拓本をそえて紹介したもの。

千年以上前の遺物
前マルビ石取場から出土

（民間研究施設）
山梨県考古学資料室
山本　寿々雄

鳴沢村丸尾青木ヶ原溶岩流下から出土した考古学の資料

梨宮公園にあった県立博物館勤務から十有余年の歳月が流れてしまった。一年に一～二度鳴沢村の現地に立ち寄っているが、その後の資料にお目にかかることは出来ない、或いは無いのか、地に埋もれてしまっているのか皆目わからない。

富士火山と考古学資料をより綿密に調べている若い研究者が地元の富士吉田市にいて、今年の夏、県庁に見えられ、いろいろ話しあったものであった。

その主は堀内真君であり将来が期待される研究者である。彼は筆者が南都留郡下で行った調査資料を要領よくまとめているが、参考になることが多い。ところで師走に入った或る日、地元の関係者にお逢いする機会がありその折、前丸尾出土の考古学資料について紹介してもらいたいのだがと云われたので、拓本を添えて青木ヶ原溶岩流の歴史的ならづけの一つとして紹介しようと思う。

甕形土器・口縁部が大きく外反する。そして肩のところがやや張りがあるようで、底部片は、切られたような平底であるところが特徴的で、おそらく青木ヶ原溶岩が流れてきた時期にすでに使用されていた遺物を良く示している。貞観六年（西暦八六四年）の即ち九世紀である。

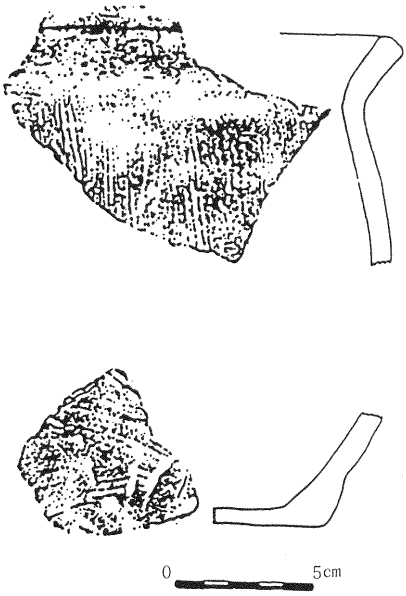
同じ富士火山による溶岩流（上部剣丸尾溶岩よりは青木ヶ原溶岩流の方が古いことになる。その一つの証となる好例ではなかろうか。

溶岩の岩取り作業は大規模な土木工事であり、その時、その時々の注意が肝心で、偶然性の発見が主であ

り、包含層を広大して考古学調査をすることは不可能な昨今である。新開発の実施の際は、関係者により広く注意がゆきわたりさえすれば、溶岩流下に埋没の古代遺跡が点として発見されることは可能である。

そして点と点とを結びやがては面となるのではなかろうか。

その日のために、青木ケ原溶岩流〔前丸尾〕の考古学資料を乞われるままに紹介する。（昭和五十六年二月一日発行・「広報なるさわ」）



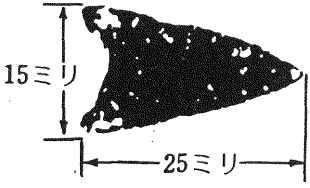
2 〔縄文時代の石鏃発見〕 昭和五十六年（一九八一）

「四千～五千年前
縄文時代の石鏃（やじり）発見
（地下二㍍）」

昨年十二月十九日鳴沢の渡辺長さんは流しの排水整備のため軒下を約二メートル五十センチほど掘ってガラ石まで届いたところ表土から二メートルのクロボクと赤土の間に光るものが目についた。初めガラスかと思ったがこんな深い所にと不思議に思い手に取って泥を落して見て驚いた。一週間前に県内の出土品等を見学して来たばかりで「石鏃」そのものである。

早速仲間を呼んで地層の写真をとり石鏃を洗って黒耀石でつくられた本ものであることを確認した。

その後山梨県の専門家である山本寿々雄先生に見ていただき年代不明だが縄文時代の石鏃と考えられ信州和田峠の黒耀石ではないだろうかということである。



鳴沢村においては①水上遺跡、②前丸尾遺跡、③大田和遺跡とかつて縄文時代から奈良時代の土器破片が発見された記録があり埋蔵文代財包蔵地として三カ所が挙げられている。①水上遺跡と③大田和遺跡については表土上において破片が発見されているものであり②前丸尾遺跡については溶岩の下から採石によって発見されている。未確認のものであるが完全な形の土器一基、青銅製象耳三つ足香炉が発見されていると聞いている。また同じく未確認だが鳴沢堀の内線水道工事の折「石鏃」が発見され、戦争中西村のある家で防空壕を掘ったところ七尺ほどのところで住居跡らしいものを見たという。

いずれにしても鳴沢村は数多くの噴火によって埋没しているため往古の姿は古記録によるほかないわけであるが三代実録に「富士山の暴火で八代郡熱土に埋る。百姓の居宅海に埋りその数知れず」とあるがこれまで集落があったかどうか立証するものは何もない、これから発見されていく遺産によって鳴沢村の本当の歴史が判明してくるわけであり、埋蔵文化財の発見によって大きく歴史が変わることが考えられるのである。

大昔の人々の残した遺産は住民共通の遺産でもありこれを守り伝えていく大切な文化財である。どんな小さなものでもこれはと思われるものが発見されたら教育委員会文化財担当に連絡して記録保存に協力されるよう願いたい。

（清水　澄・昭和五十六年二月一日発行「広報なるさわ」）